
1964年度食物学会北海道・東北旅行記

出 発

7月15日

大 食 3

9:00 大阪駅集合

華やかな新婚旅行スタイルの一群の横にゴソゴソと少々年を喰った逃難民の群も大荷物をかかえて集合。(一名遅刻) サンザン待ちくたびれてやつとホームに出る。ここでもいいかげん待ちくたびれて、さつそく旅の恥はかきすてとばかり新聞紙を拡げ、ドツカと座り込んだ。

11:00 出 発

ひとしきり騒いで席を定め、荷物を上げて、やつと落ち着いた。列車が動き始めて間もなく突然大粒の雨。

11:35 京 都 駅

工藤先生、中原のオバアちやま、その他各研究室御一行様の盛大なるお見送りを受ける。後に、テルテル様の晩酌、つまりお元気の素となつたウイスキー、栄養剤アンプル(アピ)、お菓子などの差し入れがあつた。心も軽く、身も軽く、ついでお口も軽く、はずみにはずんで汽車は行く。東京での乗りかえが気になつて、ささやかに歌を歌つたり、ソワソワと東京へ、東京へ。

18:30 東京から上野

先生、交通公社の岡ボン(岡本正昭氏の通称)さんをハラハラさせながら、オノボリさんよろしく、山手線で上野へ。上野駅ホームで再び座り込む。今度は、一般客も大勢座り込んでいる。新聞紙一枚の上に、定員過剰気味に4人も座り、コーラ、ジュースなどをグイグイあおる。(アルコールにあらず。淑女ですから。)

20:50 上野から盛岡

鈍行夜汽車に大騒動で乗り込む。さつそく荷物をひつくり返し武装をとき、新聞紙などの小道具を用いて、車内を寢室兼居間に改装。新聞という文明の利器の有難さ、便利さを

発見した。一向に眠気はなく、先生に、若き日のアマゾン行きの夢の話しなどうかがつたり、途中で乗り込んできたズーズー弁のおじさんの話しに吹き出したり、又おじさんが、私達の団体を理解しかねて、「マネージャー（先生のこと）、若い娘さんをこんなにたくさん連れて旅行ができて幸せですなあ。さすがは、京都の人には美人が多いね。」とジロジロと顔を見られ、皆顔を上げることができず、そのまま少々トロトロとして仙台着。フト気がつくと、汽車はいつの間にかシュツシュツポツポに変っていた。

汚れた顔をなんとかごまかして、いよいよ旅行気分も盛り上がり本領発揮。トランプ、おしゃべり、食べること。そして、ワッペンを背中にはり合いしたり、ウロウロ、ワイワイと車内はどこかの教室のようにぎやかさになった。

11:45 盛岡から十和田

盛岡で小さなディーゼルにのりかえ、岩手の田舎を走った。啄木で有名な渋民村をすぎる。"シブタミの山に向いて言うものなし

シブタミの山はネムタかりけり。"

目をしつかりととじ、口をポカリンと開け、これから訪れる十和田湖などを夢に見ながら、車のユレに合わせてコクリコクリと十和田南についた。ここからバスで休屋へ。そして、船で十和田ホテルまで行つた。夕方の湖は曇つていて寒かつた。湖からホテルまで急な山道を、道端に咲いているあじさいの花をつみながらゆつくりと登る。宿の水は冷たくて、ハンカチ程度のものを洗つていても耐えられなくなる。その夜は、さすがの私達も夜行の疲れで、どこからか聞える水音を聞きながらすぐ寝てしまった。

十和田より函館

短食 2の1

東北での一夜が明けると、どんよりとした曇空、吐く息が白く見える冷たい朝であつた。フキ、ワラビ、ゼンマイ等の、山菜料理のおいしかつた事が印象に残っている。

7時30分 朝もやをついての出発。神秘的な色を漂わせる十和田の湖に別れを告げ、昨日、ガイドさんに習つた"湖畔の乙女"のコーラスを乗せて、ダケカンバの木々の緑の